国際研究会　発表原稿募集案内

PRIRVDBJ　ブルターニュ地方審議会後援地方振興研究プログラム

（農産物の産消交流の日本とブルターニュを基盤とした比較研究）

第２回日仏国際研究会

「分かち合う農業」

産と消の連環を基盤とする産直農業のあり方と可能性を問う

日時、場所

2008 年 11 月 6−7−8 日　フランス、レンヌ第２大学

主催

レンヌ第２大学　社会人類学系研究室・レンヌ日本文化研究センター所属、ブルターニュ地方振興研究プログラム

農産物の産消交流に関する日本とブルターニュの比較研究プログラムは（2004 年 9 月開始、代表、雨宮裕子、レンヌ第 2 大学、社会人類学系研究室所属・レンヌ日本文化研究センター所長）は、これまでの成果を発表するために、日仏国際研究会を開催するはこびとなりました。この第 2 回研究会は、プログラムのメンバーに加えて、産消交流を基盤とした「分かち合う農業」に関心をもつ多くの方々に、参加していただきたいと思います。研究会には、同時通訳がつきますので、日本語で発表、討論していただけます。こちらでも、内外の研究者や、研究機関に声をかけ、充実した討論会になるよう、心がけています。

発表論文は選考委員会が選びます。そのため、あらかじめ要約を 4 月 15 日までにお送りください。要領は文末に記してあります。また、発表論文は研究会の後で、編集出版の予定（フランス語、英語、たぶん日本語でも）があります。収録論文の選考その他も、委員会が担当しますので、ご了承ください。

発表論文の主要テーマ

農業、オータナティヴな経済、都市 - 農村交流、食教育、環境問題、地方文化の再考（村おこし）などを研究していらっしゃる方の、発表を募集します。テーマは大きく分けると 4 つになります。そのひとつ、ひとつは、日仏農産物産消交流研究会のフランスのメンバーが、共著「分かち合う農業」*L’Agriculture participative-Dynamiques bretonnes de la vente directe*, PUR, 2007, の中で考えてきたことです。

日仏農産物産消交流研究会は、「ブルターニュと日本の比較分析研究－農産畜産物の産直ネットを基盤とした都市と農村の交流を考える。人の輪が支える持続的な村おこしのあり方とは何か」をテーマに発足した研究会です。研究は、4 つの柱にそって、進められてきました。その 4 つの柱が、発表募集の 4 つのテーマです。調査地、研究対象はブルターニュと日本には限りません。調査対象が多様であれば、それだけ、分析や研究方法の比較論議が充実することでしょう。皆さんのまわりで、地産地消や食教育などを研究している方にも、是非、お声をかけてくださるよう、お願いいたします。原稿参加のみで、当日いらっしゃれない方は、その旨、あらかじめお知らせください。

１） 都市と農村の交流

ここでとりあげるのは、土地の使用、管理に関る、法的、政治的な制約の問題です。市街地、農業用地の振り分けと管理は、環境保全や投機の思惑ももからんで、複雑な様相をみせています。人の暮らし、人と自然の共存など、都市と農村の交流には色々な形があります。その関係も共生、拮抗、対立とさまざまです。「環境にやさしい農業」という農業を推進するとしたら、都市と農村はどう空間を分かち合っていけばいいのでしょうか。都市計画の上では、青空市場、道の駅（農家の直販所）、インターネット産直など、生産者と消費者（都市と農村）を直結するシステムは、どう評価されているのでしょうか。新しい産消交流のありかたや、その実現に向けての政策や展望なども、研究課題のうちです。「環境にやさしい農業」の擁護や促進運動の分析は、都市と農村の交流に、それがどんな影響を与えているかを知る上で、有用です。

２） 有機食品 - フェアートレード商品の流行とそのゆくえ

ここで扱うのは、産直に取り組む、都市の消費者と農村の生産者との間の、人とモノをめぐる関係です。産直の輪に加わる前と後では、生産者にとって、消費者にとって、何がどう変わったのでしょうか。産直は、人と人の結びつきに、どんな影響力をもっているのでしょうか。

有機食品やフェアートレードの品物は（フランスでは）あらゆる市場に出回り、スーパーでも、コーナーを作って、見分けがつくように並べられています。これは、消費者の意識が高まったからでしょうか。消費者は何を基準に商品を選んでいるのでしょうか。生産者についてみるならば、慣行農業に取り組んでいる人と、有機農業に取り組んでいる人とでは、暮らしにどんな違いがあるのでしょうか。「安全で環境にやさしい農業」という言葉をよく耳にしますが、それは、いったいどんな農業なのでしょうか。農薬や化学肥料の使用規定や制限、トレーサビリティなどの栽培記録は、どこまで検証できるのでしょうか。また、検証することに意味があるのでしょうか。「品質」や「安心」は、こうした方法で管理できるのでしょうか。

３） 食教育と栄養のバランス

子どもの食教育は、学校給食や学校という教育の場で行われていますが、家庭の食生活の影響も見逃せません。今回は、栄養のバランスや食と健康の問題を、産と消の交流実践を視野に入れて考察した研究発表を、お願いします。給食に例をとるならば、地元の農産物を使った給食の意義や、子供たちと生産農家の交流を教育の一部に組み入れたりといった、食教育の実践例やそれを取り巻く問題を、取り上げていただきたいです。フランスの研究メンバーは 2005 年 5 月に、日本の小学校を視察しました。その際、とりわけ感心したのは、各校に栄養士が配置されていて、その栄養士が教師に協力して、生活科や理科の授業に参加していることです。栄養士は、食べ物、健康、環境、そして食べ物と暮らしにかかわる分野で、教師に手を貸していました。給食には、様々な立場の人たちが、色々な形で関わっています。請負業者、生徒の父母、教師、理事会、給食費を援助する地方自治体、そして、子どものアレルギーや肥満の増加を心配する医師の関与もあります。食教育の現場に携わる人たちの、役割分担は複雑で、検討の必要があると思われます。

４） 地域文化の力

土地に根ざした文化を基盤とする、村おこしのあり方に目をすえて考察を続けると、地域社会における人とモノの交流が見えてきます。どこで、どのような人々が、どんな暮らしを営んでいるのかを、

地域の人の輪の働き、産消交流の実践例などを取り入れて、分析、報告してください。地域にはそれぞれ特性があり、発展の仕方も様々です。けれど、安全で豊かな食を求める気持ちは、いずこも同じです。食料の自給はもちろん、大きな課題ですが、ここでは、消費者と結びついた食料の生産活動や流通が、地域の文化の活性化にどんな効果をもたらしているか、という観点から取り上げてください。産と消の結びつきに、何を求めて人々は関ってくるのでしょうか。消費者を抱え込んだ市場の開拓なのでしょうか。それとも、生産者によりそって、農を共に守ろうという市民の連帯活動なのでしょうか。産消交流は、個人プレーなのでしょうか、それとも、グループ作りを目指した動きなのでしょうか。グリーンツーリズムは農村の魅力を見直してもらうのに一役かっています。農村の人々が、都会の人々に、農村の景観や環境保全を、身近な問題として分かち合ってもらうには、どのような都市―農村交流を、育てていけばいいのでしょうか。

論文審査学術委員会
委員会は PRIR-VDBJ 日仏農産物産消交流研究会のメンバーを中心に編成しました。数字は 4 つのテーマの担当部門に該当します。
Ali Aït Abdelmalek, Mr, Sociologue, Rennes (4)
雨宮　裕子, Ms, Anthropologue, Rennes (3)
姉歯　暁, Ms, Economiste, Tokyo (3)
Danièle Bénézech, Ms, Economiste, Rennes, (2)
Odile Castel, Ms, Economiste, Rennes (4),
Yuna Chiffoleau, Ms, Sociologue, Montpellier (4)
Sophie Dubuisson-Quellier, Ms, Sciences Politiques, Paris (2)
Guy Durand, Mr, Agro-économiste, Rennes (1)
Jean-François Grongnet, Mr, Agronome, Rennes (3)
Michel Renault, Mr, Economiste, Rennes (2)
Yvon Le Caro, Mr, Géographe, Rennes (4)
Marc Humbert, Mr, Economiste, Rennes (1),
末原　達郎, Mr, Anthropologue, Kyoto (1)
杉村　和彦, Mr, Anthropologue Rural, Fukui (4)
田端　博邦, Mr, Juriste, Tokyo (4)
André Torre, Mr, Economiste, Paris (1)
薬師院　仁志, Mr, Sociologue, Osaka (4)

発表原稿の規定
発表論文の提案はフランス語、英語、日本語のどれかで書いてください。
フランス語、英語の場合、1 ページのレジュメ（500 語まで）に短い履歴書、主要著書リスト（１０本まで)、発表論文に関するキーワードを 5 つ添え、ワードの添付文書で下記のメールアドレスあてに、送ってください。
日本語の場合、1 ページのレジュメ（１０００字まで）に短い履歴書、主要著書リスト（１０本まで)、発表論文に関するキーワードを 5 つ添えて、ワードの添付文書で下記のメールアドレスあてに、送ってください。
提出締め切り　2008 年 4 月 15 日

villecampagnebj@yahoo.fr

郵便での連絡先 ：
Hiroko AMEMIYA, CRCJR/LAS, Université Rennes 2 Haute Bretagne, 3 allée Bobière 35000 Rennes　France
論文の採否通知　2008 年 6 月 1 日
発表原稿送付締め切り　2008 年 9 月 1 日　日本語　1 万字　文字の大きさ１０,５　一行空け（フランス語３万５千字）